

令和7年度

自己点検・評価書
(学校評価報告書)

大阪教育大学
附属天王寺中学校

1 附属天王寺中学校の現況

(1) 学校名

大阪教育大学附属天王寺中学校

(2) 所在地

大阪府大阪市天王寺区南河堀町4-88

(3) 学級数・収容定員

12学級(1学年4学級) 収容定員432人(1学級: 36人)

(4) 幼児・児童・生徒数

428人(男子209人・女子219人)

(5) 教職員数

校長(併任) 1人, 副校長 1人, 主幹教諭 1人, 教諭 20人(うち, 臨時的雇用4人,),
非常勤講師 7人
事務職員 3人(専任1人, 事務補佐員2人), 臨時用務員(用務員)1人

2 附属天王寺中学校の特徴

質実剛健の校風のもと、生徒一人ひとりがお互いの多様性を尊重し合う中で、主体的に協同的な学びを展開していくことを重視し、将来の市民社会をリードしていくための“生きる力”の育成をめざしている。
天王寺型中高連絡進学に基づく6年一貫教育の研究と実践を続けている。

3 附属天王寺中学校の役割

- (1) 大阪教育大学と一体となり、教育の理論と実践に関する研究を行うこと。
- (2) 教育に関する理論を実践し、授業や研究会で実証すること。
- (3) 大阪教育大学の教育実習機関として、効果的な実習活動を行うこと。
- (4) 大阪教育大学が行う現職教員の再教育の一端を担うこと。

4 附属天王寺中学校の学校教育目標

- ・ 正義を愛し、真理を追究する旺盛な向学心を持ち、透徹した判断力を養う。
- ・ 強固な意志を持ち、頑健な心身を育て、自主的・積極的な実践力を身につける。
- ・ 他人を愛し、自然の恵みに心寄せる豊かな感性を育てる。
- ・ 社会の一員となるための、責任感・遵法・奉仕・協調の精神を養う。

5 附属天王寺中学校の学校教育計画

1. 生徒の学力と、「生きる力」を育てる活動を、各教科・分掌で工夫し、実践する。また、自治会やホームルーム等の集団における生徒の自主性と主体性に基づく諸活動をする。
2. 生徒の活動を支えるための、教育環境を整備・充実させるとともに、生徒の将来に向けた進路選択と実現に向けた取り組みを行う。
3. 学校独自の取り組みを通してカリキュラム全体の充実を図り、教育研究・教育実習・生徒指導の各領域における成果を発信する。

6 附属天王寺中学校の令和7年度 重点目標(評価項目), 具体的な取組内容(評価指標)・評価結果

評価の基準	
A	高いレベルで達成できた
B	達成できた
C	一部達成できなかった
D	ほとんど達成できなかった
E	判定できない

<p>学校教育目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・正義を愛し, 真理を追究する旺盛な向学心を持ち, 透徹した判断力を養う。 ・強固な意志を持ち, 頑健な心身を育て, 自主的・積極的な実践力を身につける。 ・他人を愛し, 自然の恵みに心寄せ豊かな感性を育てる。 ・社会の一員となるための, 責任感・遵法・奉仕・協調の精神を養う。 	
<p>学校教育計画</p> <p>(1)生徒の学力と、「生きる力」を育てる活動を、各教科・分掌で工夫し、実践する。また、生徒会・自治会やホームルーム等の集団における、生徒の自主性と主体性に基づき諸活動を支援する。</p>	

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	意見・理由	評価	
(1) 互いの個性と能力を尊重する態度を育成し, 協働を通じて個々の生徒の力を十分に発揮させる。	<p>■健康人権教育部</p> <p>中高で各教科の授業内容などと連携した研修を開催し、教員一人ひとりの生徒対応力の向上や学校安全に対する意識の向上に努める。</p>	<p>中高で救急救命講習を実施する中で、消防署の支援などを通じて、AEDの使用を含めた実践的運用の確認が実施できた。訓練や教科の授業を通じて、教員も含めて学校安全に対する意識の向上を図ることができた。</p>	<p>① 防犯や消防などの訓練についてやアサテレオタイプライ化した訓練のみになっている現状がある。授業以外や人が不足していると きの危機対応の実践的対応を確認する機会を中高連携して実施していきたい。</p>		A	特記事項なし

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取り組み内容 (評価指標)	自己点検評価		学校関係者評価		学校関係者評価を踏まえた改善策		
		達成状況	改善点	評価	意見・理由		評価	
(1) 互いの個性と能力を尊重する態度を育成し、協働を通じて個々の生徒の力量を十分に発揮させる。	<p>■国語科</p> <p>討論活動、発表活動とそれに至る話し合いや意見交流の機会を担保し、教科の内外的、個人が様々な学びを得ることのできる学習集団を育てる。</p>	<p>生徒同士で学習課題を設定する機会を設け、課題の立て方や論点の整理、説明の仕方を互いに学び合う場面が増えた。</p> <p>その結果、個々の生徒が多様な役割を通して学びを深める学習集団としての基盤が形成された。また、意見の違いを否定ではなく問いとして扱う姿勢が育ちつつあり、学習内容を「自分ごと」として捉え、他者の考えに触れることで理解を更新する学びが一定程度実現できた。</p>	<p>討論・発表活動の充実に向けては、話し合いの質に個人差が残った。合意形成を急ぐあまり根拠の吟味が浅くなる場面も見られた。生徒同士で学習課題を設定する活動においても、課題が抽象的になりやすい、あるいは「すぐ答えが出る問い」に収束してしまうなど、問いの精度を高める支援が必要である。</p>	B	②	<p>授業において、生徒は教師の定められた目的とする姿に生徒を導くための工夫を感じた。改善点も妥当。</p>	A	特記事項なし
	<p>■社会科</p> <p>社会に主体的に参画できる公民的資質を持った生徒を育成することを目標とし、生徒が能動的に取り組める協働的な活動を通じて、生徒自らが課題を発見し、事実に基づいて論理的に考察・表現できるような授業を実践する。</p>	<p>協働的な活動を通して、生徒は社会の課題を自ら発見し、事実を根拠に多面的・多角的に考察する力を身に付けた。また、自分の考えを論理的に表現しようとする姿勢が育ち、社会に主体的に参画しようとする公民的資質の向上が見られた。</p>	<p>課題設定の段階でより一層生徒の主体性を引き出す工夫を重ねるとともに、根拠に基づいて考察・表現する力をさらに高められるよう、指導方法の改善に努めていきたい。</p>	A	③		A	特記事項なし

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取り組み内容 (評価指標)	自己点検評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	
(1) 互いの個性と能力を尊重する態度を育成し、協働を通じて個々の生徒の力量を十分に発揮させる。	<p>■理科 実験や観察を通して、「協働する能力」や「科学的に探究する力」を伸ばすための授業実践に取り組む。</p> <p>実験では、予め決められた手順通り実験を行うのではなく、準備物や実験操作などを自分で考えて、主体的に実験に取り組む授業を目指す。</p>	<p>中高のそれぞれの理科実験において、主体的に取り組む実験を行う機会を設けることができたり、「科学的に探究する力」を評価する場面は数多く設けることができず、ただ主体的に取り組ませただけといった形式になることもあった。</p>	<p>主体的に取り組ませた実験により、生徒の「協働する能力」や「科学的に探究する力」がどのように向上したのかを評価する必要がある。</p>	④		特記事項なし
			B		A	
	<p>■音楽科 アンサンブルの機会を多く取り入れ、音楽表現を創意工夫する一連の過程を通して、個人の音楽技能をさらに高めるとともに、「チームで働く力」を育む授業を展開する。</p>	<p>アンサンブルはまさに探究的な学びそのものである。音や音楽についての興味や関心を高め、音と音とを通した「対話」を軸に、生徒の創造性や感性を育む授業づくりに取り組んだ。</p>	<p>限られた授業時間の中で、自己表現するために必要な音楽技能をどのように育んでいけばよいのか検討していく。</p>	⑤	<p>音楽は評価Aだと思うが、器楽は改善の余地があると思う。</p>	<p>器楽に関する指導法の再検討を行い次年度自己評価に反映させる。</p>
				A		A

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取り組み内容 (評価指標)	自己点検評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	
(1) 互いの個性と能力を尊重する態度を育成し、協働を通じて個々の生徒の力を十分に発揮させる。	<p>■美術科</p> <p>「造形的な見方・考え方」を働かせ、学校だけでなく普段の生活、身のまわりを造形的な視点で捉え、自分としての意味や価値を作り出す意識を育む。そのために、授業内で造形的な視点を働かせる考え方、捉え方を学び、日常生活のなかでその視点を働かせる課題を課す。</p>	<p>昨年引き続き、大阪教育大学手取教授、谷村准教授と共同で、焚火による陶芸制作を実施。焚火による陶器の焼成過程を体験から学ぶ取り組みを行った。また、風景を捉える視点を学芸会の書割に落とし込む方法論を通して、知識を活かす学習課題の設定をした。以上から、経験学習による習得のサイクルを構築し、系統的・合理的知識も含めて、自己の造形的な視点を働かせる授業を実践することができた。</p>	<p>昨年に引き続き、大学教員との共同研究によって人的環境づくりには取り組めたが、物的環境(設備、材料、用具)の充実にも取り組み必要がある。</p>	⑥		
	<p>■保健科</p> <p>課題解決的な学習を授業を進める中で、協働しながら個人の人技術向上に繋がる指導を行う。ルールや練習方法など自分たちで調べ、実践していく中で自他を尊重する態度を養う。</p>	<p>ルールや効果的な練習方法について自ら調べ、実践と振り返りを繰り返す過程を設定したことで、主体的に学ぶ姿勢が見られた。活動を通して、仲間の考えや技能を尊重し合う態度も育まれ、自他を大切にしながら学び合う姿が確認できた。</p>	<p>課題解決的な学習を通して一定の成果は見られたものの、協働の質には差が見られた。話し合いが形式的になった班や、意見を出さず生徒が固定化する場面もあり、全員が主体的に関わるための手立てには改善の余地がある。</p>	⑦		

特記事項なし

特記事項なし

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取り組み内容 (評価指標)	自己点検評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	
(1) 互いの個性と能力を尊重する態度を育成し、協働を通じて個々の生徒の力量を十分に発揮させる。	<p>■技家科 技術・家庭科では、単に知識理解だけでなく、技能獲得のために実践を通じた授業実践を多く取り組んでいる。同じ作品や作業でも、個々でやり方の違いや個性が出てくることがある。その中で、班で教え合うことで、協働学習の要素が出てくるものと考える。</p> <p>■英語科 生徒が主体的に判断して、学習過程において個別最適な学びと協働的な学びを往還することより、生徒一人ひとりが「生きた知識・技能」を身に付けられるような授業実践</p>	<p>実技教科として特に実習の授業改善を適宜行い、単元全体を見通した指導計画への反映や、年間を通じた継続的な実習への取り組みを行うことができた。</p>	<p>校種内・校種間で協働した授業実践、共同研究の実施と学会発表など、外部発信も強化している。</p>	A	<p>⑧ ・技能獲得、という指標どおりの授業だと思う。 ・生徒は実践的な学習で技能を習得することができたと感じている。</p>	A 特記事項なし
	<p>日々の授業から生徒が主体的に判断できるような環境を設定した。また、学習の中で生徒が個別、協働の往還を自らの判断で行う場面も見られた。一方、「生きた知識・技能」が身についたかどうかは、それを測る方法(テスト問題の質など)も含め、検討が必要な部分もある。</p>	<p>教師の指示によって生徒が個別・協働を往還する状態から一歩前進し、より多くの場面で「生徒の判断で」個別と協働を往還するような学習環境設定を行っていく。獲得した知識・技能が「生きた」ものになっているかどうかを測定するための方法を確立することが必要である。</p>	<p>⑨ ・生徒が高いレベルで主体的に動くことができている</p>	A	A 特記事項なし	

6 附属天王寺中学校の令和7年度 重点目標(評価項目)、具体的な取組内容(評価指標)・評価結果

評価の基準	
A	高いレベルで達成できた
B	達成できた
C	一部達成できなかった
D	ほとんど達成できなかった
E	判定できない

学校教育目標	<ul style="list-style-type: none"> ・正義を愛し、真理を追究する旺盛な向学心を持ち、透徹した判断力を養う。 ・強固な意志を持ち、頑健な心身を育て、自主的・積極的な実践力を身につける。 ・他人を愛し、自然の恵みに心寄せる豊かな感性を育てる。 ・社会の一員となるための、責任感・遵法・奉仕・協調の精神を養う。
学校教育計画	(2)生徒の活動を支えるための、教育環境を整備・充実させるとともに、生徒の将来に向けた進路選択とその実現に向けた取り組みを行う。

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策	
		達成状況	改善点	意見・理由	評価		
(1) 生徒の将来の目標と生徒を取り巻く社会の状況も含めた進路についての意識を深めさせ、その実現に向けた支援を行う。	<p>■教務部 校務支援システムの円滑で安定した運用をはかるとともに、小中高間の進路用データの円滑な引継ぎを進路指導担当と連携を図りながら支援する。(中)(高)昨年度に改訂された教務規定の適切な運用について、各教科を支援する。</p> <p>■進路指導部 (中) 生徒自らが、自身の生き方・能力・関心・適性を多面的・多角的に考え、将来に対する目的意識を持てるような取組みや情報提供を行う。</p>	<p>校務支援システムを安定して運用することができた。(中)進路用データの書き出しの支援を行い、進路担当と連携を行うことができた。また、教務規定を適切に運用するとともに、現状に合った改訂を行った。</p> <p>(中) 将来に対する目的意識を持って、進路選択できるような、教員との面談をはじめ、進路通信等で情報提供を行うことができた。</p>	<p>(中) 進路規定を現状に合う形となつていくか継続して点検を行う。</p> <p>(中) 進路について考えるのは、3年生が主となつてしまう側面がある。そのため、他学年でも発達段階に応じて進路について考えられるような取組みや情報提供を行いたい。</p>	<p>⑩</p> <p>A</p> <p>⑪</p> <p>A</p>	<p>・進路進学の情報提供も多いとはいえず、生徒は連絡進学以外、またより広い視野でキャリアを考えるための情報が少ないと感じている。</p>	<p>A</p> <p>E</p>	<p>特記事項なし</p> <p>3年になってからの進路指導ではなく、早い時期からのキャリア形成を自覚させる指導が必要。</p>

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取り組み内容 (評価指標)	自己点検評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策	
		達成状況	改善点	評価	意見・理由		評価
(2) 生徒と教員が協働して健康と安全を意識した教育環境の整備を図る。	<p>■健康人権教育部 学校に内在する防犯、災害リスクに対して、生徒・教職員がその要因を共有し、予防的行動を適切に行えるよう、本校の災害リスクや地域リスクに対応したマニュアルの改定を行っていく。生徒・教員の減災・防犯意識を高められる安全教育について各教科と連携を取りながら積極的に取り組む。</p> <p>■音楽科 生徒が安心して音楽活動に取り組むことができるよう、生徒と教員が協働し、音楽を奏する空間（音楽室・音楽棟）の環境整備をすすめる。</p>	<p>訓練などを通して危機管理の体制を再確認することができた。可能な限り、本校が直面している災害面でのリスクについて、生徒自身が自ら気づいて自助・共助・公助の視点から実践的訓練に取り組むことができた。</p>	<p>年2回の危機管理訓練は、基礎的確認事項が中心で、シナリオの固定化が懸念される。3年間（6年間）を意識した実践的な（イレギュラー要素も含んだ）訓練を体系的に取り組み、必要性がある。また、変化する危機管理状況に対応したマニュアル改定を消防・警察署、大学の先生などのご助言をいただきながら実践的なものに改定していく。</p>	⑫			特記事項なし
		<p>音楽施設を使用する全ての生徒に対し、清潔かつ整った環境で音楽を奏することができるよう意識づけをおこなった。また2学期より、授業場所が音楽室と大学中央館ミレニアムホールとなった影響もあり、楽器の置き場所の変更や音楽を主体的に学ぶための環境整備をおこなった。</p>	<p>本校の音楽施設には楽器庫がなく、楽器を安全に保管する場所がない状況が続いている。引き続きこの状況の改善を具申し、生徒たちが安心して芸術活動ができる環境を整えていく。</p>	⑬			特記事項なし

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取り組み内容 (評価指標)	自己点検評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策	
		達成状況	改善点	評価	意見・理由		評価
(2) 生徒と教員が協働して健康と安全を意欲した教育環境の整備を図る。	<p>■保体科</p> <p>授業を行う前後における運動の場の安全確認は当然だが、授業中も生徒がお互いに健康チェックを行う制度を構築する。</p>	<p>授業前後における運動環境の安全確認を徹底するとともに、活動前には体調や既往のけがの有無を確認し、活動中も適宜声を掛け合うことで、体調変化に早期に気付く場面が見られた。また、仲間の様子を気に掛ける態度が育ち、安心して活動できる雰囲気づくりにもつながった。</p>	<p>健康チェックの制度は機能したものの、確認が形式的になる場面も見られた。特に活動に集中するあまり、声かけが十分でない時間帯もあったため、チェックのタイミングや方法をより明確にする必要がある。予算の都合上、テニスコートの補修工事の要望が通らなかった。来年度も引き続き申請していく。</p>	B	<p>⑭</p> <p>・毎回の体育授業での安全チェックが徹底されている。</p>	A	特記事項なし
	<p>■技術家庭科</p> <p>技術・家庭科での実践は、食材を扱う調理実習やはんた付けなどやけどの危険性のある作業が出てくる。それゆえ、他教科と比べて指導する教員が意識して安全対策や実践後の清掃指導を実施するなど、環境整備を図ることが生徒の健康と安全を守るために必要である。</p>	<p>令和7年度教育研究会において多くの参観者に授業実践を公開することができた。また、ホンモノ体験として技術・家庭科で共通の内容で実習を行うことができた。調理実習を行う際は、アレルギーに配慮して実習を行うことができた。</p>	<p>生徒ひとりひとりが持つ食物アレルギーが違いため、調理実習を扱う食材を考え、調理実習で扱う献立をアレルギーを持つ子も参加できるように工夫する。</p>	<p>⑮</p>	A	特記事項なし	

6 附属天王寺中学校の令和7年度 重点目標(評価項目)、具体的な取組内容(評価指標)・評価結果

評価の基準	
-------	--

A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	おおむね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

<p>学校教育目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・正義を愛し、真理を追究する旺盛な向学心を持ち、透徹した判断力を養う。 ・強固な意志を持ち、頑健な心身を育て、自主的・積極的な実践力を身につける。 ・他人を愛し、自然の恵みに心寄せ豊かな感性を育てる。 ・社会の一員となるための、責任感・遵法・奉仕・協調の精神を養う。
<p>学校教育計画</p> <p>(3)学校独自の取組を通してカリキュラム全体の充実を図り、教育研究・教育実習・生徒指導の各領域における成果を発信する。</p>

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	
<p>(1) 最近の学力観をふまえてつつカリキュラムマネジメントを実施しながら各教員と学校全体の教科指導力を高める。また、ICTを活用した学習指導の実践を進め、その効果と課題を探るとともに、教科横断的な視点での指導実践を蓄積、発信する。</p>	<p>■教務部 ロイノートやGoogleWorkspaceといった授業支援ツールの運用や運用支援、GIGA端末やBYOD端末の運用支援を図り、ICTを活用した授業実践の支援を行う。</p> <p>(中)(高)授業におけるICT活用の現状についての調査を続け、その結果をもとにICTを有効に活用した授業実践について検討する。</p> <p>(中)次期GIGA端末について有効な活用ができるよう、納入運用について対応を行う。</p>	<p>授業支援ツールの管理運用を行うとともに、生徒用端末の運営支援をはかり、授業環境を適切に担保することができた。</p> <p>(中)次期GIGA端末導入に向けた環境構築や納入の対応を行うことができた。</p>	<p>(中)(高)ICTを活用した授業実践がより広がるような支援を適切に行う必要がある。</p>	<p>⑬</p>	<p>A</p>	<p>A</p> <p>特記事項なし</p>

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取り組み内容 (評価指標)	自己点検評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策	
		達成状況	改善点	評価	意見・理由		評価
(1) 最近の学力観をふまえてつつカリキュラムマネジメントを実施しながら各教員と学校全体の教科指導力を高める。また、ICTを活用した学習指導の実践を高め、その効果と課題を深め、その効果と課題を深めるとともに、教科横断的な視点での指導実践を蓄積、発信する。	<p>■生徒指導部</p> <p>各種学校行事におけるICT活用を通して、生徒の主体性や協働性を育むとともに、情報活用能力を高める指導を行う。実践の記録を通して課題と成果を明確化し、学習活動と連携した取り組みとして蓄積・発信していく。また、行事と教科を連携させられるようなカリキュラム・マネジメントを行う。</p>	<p>達成状況</p> <p>中学の学校行事、高校の自治会行事においてICTを活用し、生徒が企画立案・情報共有・成果発表を主体的に行う場面を設けることができた。これにより、生徒の主体性や協働性を育む機会を一定程度確保することができた。</p> <p>一方で、行事における実践内容の記録や成果・課題の整理については十分とはいえず、教科指導との関連を明確に意識した振り返りや共有までには至らなかった。</p>	<p>改善点</p> <p>・行事におけるICT活用の成果と課題を記録する様式を整備し、教科との関連を明確に整理する仕組みを構築する。 ・行事で育成を目指した資質・能力を、各教科の年間指導計画と照らし合わせて検討し、接続を意識した振り返りの場を設ける。 ・実践を単発で終わらせず、校内研究や教育実習とも関連付けながら、学校全体の指導力向上につなげる。</p>	<p>評価</p> <p>B</p>	<p>意見・理由</p> <p>⑰ ・ICTを非常に活用していると理解している。B評価ではなくA評価でよいと思う。 ・ICTを有効活用して行事の質が高まる場面も多かったが、デジタルリテラシーを理解していない生徒も一定数いる。</p>	<p>評価</p> <p>C</p>	特記事項なし
	<p>■研究部</p> <p>教育研究会での発表内容の充実を図るために教員研修を行い、指導実践を蓄積し、校外へ発信する。特に今年度（令和7年度）より認知科学を取り入れ三カ年計画を立てて研修を充実させる。</p>	<p>自由研究の発表に加えて、教員のポスター発表を実施し授業者以外の教員の研究の場を設けた。また、府内の中高へ校内研修の呼びかけを行い、地域にもともに学べる研修を立案した。</p>	<p>改善点</p> <p>・ポスター発表の充実と日常的な関わりを持つとよりよくなる。</p>	<p>評価</p> <p>A</p>	<p>意見・理由</p> <p>⑱</p>	<p>評価</p> <p>A</p>	

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取り組み内容 (評価指標)	自己点検評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	
(1) 最近の学力観をふまえてつつカリキュラムマネジメントを実施しながら各教員と学校全体の教科指導力を高める。また、ICTを活用した学習指導の実践を進め、その効果と課題を探るとともに、教科横断的な視点での指導実践を蓄積、発信する。	<p>■国語科</p> <p>GIGA端末を活用したブレゼンテーションの作成やレポート執筆の活動を行いながら、手書きのポスターや絵本作成等の活動を設定することで、生徒が多様な媒体における表現形式の違いを実感する機会を確保する。</p>	<p>写真を用いた俳句の創作活動や、漫画の表現技法を分析してGIGA端末を用いてレポートにまとめるとともに、生徒が言語・視覚・構成といった要素の関係を意識しながら表現に取り組む機会を確保した。</p> <p>これらの実践を通して、生徒はデジタル媒体における編集・構成のしやすさや情報整理の利点と、手書きによる表現がもつ即時性や感覚的な伝わり方の違いを実感し、目的や相手に応じて表現手段を選択する意識を高めることができた。</p>	<p>今後は、デジタルとアナログそれぞれの特徴を比較・整理する振り返り活動を充実させるとともに、評価規準を明確化し、「何を、どのような媒体で表現するのが適切か」を判断する力の育成を図りたい。</p>	⑰		
	<p>■数学科</p> <p>日ごろの授業から教科横断的な学び、とりわけSTEAM教育の推進に資する授業実践を行う。また、ICT機器に加えて多様な教材・教具を活用し、生徒が“ホンモノ”に触れる体験を通して、数学的な見方や考え方を定着させる学びを展開する。</p>	<p>数学科各員の主体的な研究により、授業改善に向けた実践事例の蓄積が図られているが、単元全体を見通した指導計画への反映や、年間を通じた継続的な取り組みとして定着させる点においては、さらなる工夫と改善が求められる。</p>	<p>教科会での交流、校種内・校種間で協働した授業実践、共同研究の実施と学会発表など、校内にとどまらない多角的な教員間の連携を図っていく。</p>	⑱	<p>・生徒は、エクセルなどを用いて、教わったことを実際にどう使うかまでを学習することができたと感じている。A評価でもよいと思う。</p>	<p>特記事項なし</p>

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取り組み内容 (評価指標)	自己点検評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	
(1) 最近の学力観をふまえてつつカリキュラムマネジメントを実施しながら各教員と学校全体の教科指導力を高める。また、ICTを活用した学習指導の実践を進め、その効果と課題を探るとともに、教科横断的な視点での指導実践を蓄積、発信する。	<p>■社会科学</p> <p>各授業において、積極的に教科横断的な視点を持った授業を実践し、中高社会科の部会で情報を共有したうえで、カリキュラム全体の上での社会科の意義について中高社会科で議論を行い、認識を深める。</p>	<p>教科横断的な授業実践と中高社会科部会での情報共有は概ね達成でき、社会科の意義についての議論も深めることができた。一方で、継続的・具体的な検討という点では課題が残った。</p>	<p>①</p> <p>今後は、部会での議論を継続・体系化し、具体的な実践改善につなげられるよう取り組みを深化させたい。</p>	B		特記事項なし
	<p>■理科</p> <p>「探究的に学ぶ姿勢」を育むため、理科という枠組みにとらわれずに、社会にも目を向け、広い視野で情報収集し、その情報を活用する実践に取り組む。特に、授業時に生徒がICT機器を主体的に活用する場面を増やし、探究的に情報を活用する下支えとなる力を身につけさせる。</p>	<p>各教科の授業において、探究的な情報活用手段として、生徒のICT端末を活用することができた。特に、単なる情報収集としてのツールではなく、統計的な情報処理や、動画、画像処理といった、分析ツールとしてICT端末を活用することができた。</p>	<p>②</p> <p>ICT端末を活用する際に、どうしても端末依存の生徒が出てくる生徒がおり、本質的に考えさせたいことが考えられなっている生徒が一定数いる。教員側の授業のしかけを工夫し、「探究的に学ぶ姿勢」を育むための課題設定により気を配る必要がある。</p>	A		特記事項なし

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取り組み内容 (評価指標)	自己点検評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策	
		達成状況	改善点	評価	意見・理由		評価
(1) 最近の学力観をふまえてつつカリキュラムマネジメントを実施しながら各教員と学校全体の教科指導力を高める。また、ICTを活用した学習指導の実践を進め、その効果と課題を探るとともに、教科横断的な視点での指導実践を蓄積、発信する。	<p>■音楽科</p> <p>音楽科の授業デザインをする上で慣例となっている「～すべき」を問い直す授業実践を蓄積し、音楽教員免許取得を希望する教育実習生の指導に生かすとともに、得た知見を教育研究会等で積極的に発信する。</p>	<p>本研究課題をもとに授業実践を蓄積し、第72回教育研究会にて音楽科公開授業をおこなった。「～すべき」に囚われずに教員が自律的に音楽科授業をデザインすることの重要性について、多くの教育関係者とともに多角的・多面的に検討することができた。</p>	<p>得られた知見を、音楽教員免許取得を希望する教育実習生の指導にどのように生かすことができるのかについて、引き続き検討していく。</p>	A	<p>②③</p> <p>・評価指標の内容が生徒からはわかりづらい。</p>	E	特記事項なし
	<p>■美術科</p> <p>①問題解決学習、パフォーマンス課題を協働で取り組む学習法から、発想や技能を相互に交流、影響し合える授業設計と実践。</p> <p>②ICT活用として、タブレットPCのカメラ機能及び編集アプリを活用した映像メディア表現の題材開発を進める。</p>	<p>①昨年度の国語科での映像表現の読み取りを美術科として教材化し、美術の映像作品の制作を系統的に実施。より生徒の教科横断意識の醸成をはかる授業実践を行うことができた。</p> <p>②プロの映像監督の助言から三脚を導入し、昨年度の題材案をより充実した内容へと改善することができた。</p>	<p>①教科独自の学びから、多教科を包括したカリキュラムにするための相互理解を、より深める必要がある。</p> <p>②三脚を用いた技法面での学習内容は一定の成果があった。しかし、構想面での学習内容には改善の余地が残る。</p>	A	<p>②④</p>	A	特記事項なし

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取り組み内容 (評価指標)	自己点検評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由 評価	
<p>(2) 社会の国際化や多様化に対応する力の育成に向け、中高連携および接続をふまえた取り組みを進める。</p> <p>社会の国際化や多様化に対応する力の育成に向け、中高連携および接続をふまえた取り組みを進める。</p>	<p>■生徒指導部</p> <p>体育大会や学芸会、附高祭などの行事において、生徒が多様な価値観や文化に触れ、互いの違いを認め合い尊重する態度を育成する。また、生徒自身が社会の国際化や多様性について主体的に発信・対話できるような機会を設ける。さらに、中学・高校間での定期的な連携を通じて、接続期における生徒理解の共有と、多様性に対応した実践の充実を図る。</p>	<p>体育大会や学芸会、附高祭などの行事において、生徒同士が協働する場面を通して、多様な意見や価値観に触れる機会を設けることができた。企画や運営の過程で対話を重ねる中で、互いの立場や考え方を尊重しようとする姿勢が見られ、多様性への理解を深める一助となった。</p> <p>中高連携については、中学生徒指導部長と高校生徒指導部長がこまめに連携を取り、生徒の状況や課題について随時情報共有を行った。</p>	<p>・行事を通して多様性理解の取組と、中高連携の視点とをより意図的に結び付けることで、開発の対応にとどまらない体系的な実践へと発展させることが今後の課題である。</p> <p>・中学生徒指導部長と高校生徒指導部長との連携は密に行うことができたが、その内容を生徒指導部全体や関係教員へ十分に共有する仕組みは十分とは言えない。組織的な連携へと広げていく体制づくりが必要である。</p>	<p>⑲</p> <p>A</p>	<p>⑲</p> <p>A</p>	<p>学校関係者評価を踏まえた改善策</p> <p>特記事項なし</p>
	<p>■進路指導部</p> <p>(中高) キャリアパスポート(生徒が活動を記録し蓄積するもの)について中1～高3で実施。中高で引き継ぐに当たってどのように連携できるのかを検討する。特に高校生は自分の記録として主体的に取り組むようにLHRなどでの活用を見直し、推薦入試受験の有無に関わらず自分自身を振り返らせる機会を設ける。</p>	<p>(中高) 各学年において、キャリアパスポートを記入する時間を設けたり、記入するよう促すことができた。生徒自身が自身の学びを振り返り、その学びをキャリアパスポートで蓄積することで、必要な時に自身の学びを振り返ることができた。</p>	<p>(中高) 中学校から高校へのキャリアパスポートの引継ぎについては議論できていないので、今後どのように扱うかを決める必要がある。</p>	<p>⑳</p> <p>A</p>	<p>⑳</p> <p>C</p>	<p>学校関係者評価を踏まえた改善策</p> <p>特記事項なし</p>

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取り組み内容 (評価指標)	自己点検評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由 評価	
<p>(2) 社会の国際化や多様化に対応する力の育成に向け、中高連携および接続をふまえた取り組みを進める。</p> <p>社会の国際化や多様化に対応する力の育成に向け、中高連携および接続をふまえた取り組みを進める。</p>	<p>■研究部 「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等/主体性」の3項目の小中高での関連性が明示された授業実践を行う。</p>	<p>各教科会で中高のカリキュラムを意識し、また教科横断として教科を横断する授業の立案を行った。</p>	<p>国際化や多様化に対応する学力について継続して議論を深める。</p>	⑲		
	<p>■社会科 中高社会科で議論を行ってカリキュラムを検討し、教科内の領域分野の横の連携と、中高の縦の連携を意識した授業を実践し、情報を共有すること、授業の質を向上させる。</p>	<p>中高社会科での議論を通してカリキュラムを検討し、教科内の領域分野の横の連携や中高の縦の連携を意識した授業を実践することができた。また、その成果や課題を共有することで、授業の質の向上につなげることができ、概ね目標は達成されたと見える。</p>	<p>今後は、横断的・縦断的な連携をより計画的・体系的に位置付け、共有した成果を具体的な指導改善へと確実に反映させる体制づくりを進めていきたい。</p>	⑳		特記事項なし

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取り組み内容 (評価指標)	自己点検評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	
(3) 本校の実践を広く地域に発信するとともに、教育実践・研究活動での地域との連携を進める。	<p>■保体科</p> <p>中高ともに男女共習での実技の実施の機会を増やし、多様化に対応する力の育成を目指すとともに、中高でのスムーズな接続に繋げる。</p>	<p>中高ともに男女共習による実技の機会を増やすことができた。技能差や体力差を踏まえたルールの工夫や役割分担を行うことで、互いを尊重しながら協働する姿が見られた。多様な仲間と関わる経験を通して、状況に応じて考え行動する力の育成に一定の成果が見られた。</p>	<p>男女共習の機会は増えたものの、技能差や体力差への配慮が十分でない場面も見られた。特定の生徒に負担が偏ることがないよう、ルール設定や活動内容のさらなる工夫が必要である。</p>	<p>⑳</p> <p>・男女共習は意識しており、評価Aは適切だと感じる。</p>		特記事項なし
	<p>■研究部</p> <p>①教育研究会指導助言講師及び講演講師について、教育研究会テーマ、教科テーマに合う指導者を大阪教育大学へと依頼する。</p> <p>②推進日に大阪府下の教員と共に学び合う研修を立案する。</p> <p>③研究成果と教育研究会実施報告を集録にまとめる。</p>	<p>①一部の教科を覗き指導助言を大教大教授に依頼をし、事前および当日の指導をお願いした。</p> <p>②推進(3回目)は府内の中高向けにチラシを作成し、校内研修に校外の教員の参加も可能にした。</p> <p>③集録については、教育研究会の実施報告だけでなく、研究部の歩みも掲載した。</p>	<p>大教大との連携と府立や市立との連携の在り方を探る。</p>	<p>㉑</p>		特記事項なし

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取り組み内容 (評価指標)	自己点検評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	
(3) 本校の実践を広く地域に発信するとともに、教育実践・研究活動での地域との連携を進める。	<p>■国語</p> <p>教育研究会および各学級の授業実践を積極的に発信し、本校の発展を踏まえ、他校の実践・提言を踏まえ、カリキュラムマネジメントを行い、よりよいカリキュラムを作成する。</p>	<p>教育研究会および各学級の授業実践を積極的に発信した。具体的には、教育研究会において中・高2の授業公開を行い、各学級の授業公開では中2・高2の授業公開を実施した。授業公開後には参観者との意見交換や助言を受け、機会を設け、他校の実践や提言を踏まえながら、授業設計や単元構成、学習活動の意図を振り返ることができた。</p>	<p>授業公開は実施できたものの、参観者から得た助言や評価の視点が授業者個人の振り返りに留まった。今後は他附属や大阪教育大学等との連携についても、授業公開に加えて共同での検討機会や継続的な研究交流を増やし、外部の知見をより計画的に取り入れることで、カリキュラムマネジメントの実効性を高めていきたい。</p>	③①		A
	<p>■数学科</p> <p>大阪教育大学数学会に参画し、授業研究会で授業提案を行うなど、数学教育部門および附属学校園算数・数学科との連携を推進する。また、大学内に留まらず、広く府下の公立学校と日々の授業実践について交流の場を設けるなどして、日常的な連携体制を構築する。</p>	<p>大阪教育大学数学会において多くの参観者に授業実践を公開することができた。また、日常的に本校の授業実践を公開するGoogleスペース「今日の算数・数学@おおさか」を開設・運営し、広く公立学校の教員、本学数学教育部門の教員との交流を行うことができた。</p>	<p>本校の実践が他校でどのように活用されているかを調査していきたい。</p>	③②		A
						A
						特記事項なし
						特記事項なし

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取り組み内容 (評価指標)	自己点検評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策	
		達成状況	改善点	評価	意見・理由		評価
(3) 本校の実践を広く地域に発信するとともに、教育実践・研究活動での地域との連携を進める。	<p>■理科 附属天王寺が従来より大切にしている、「実物・本物を見る指導」の実践を、研究集録や研究会などを通じて発信するとともに、学校ホームページも活用し、その様子を校外に配信する。</p> <p>■音楽科 ①日々の授業実践や生徒たちが生き生きと芸術活動に取り組む姿をホームページ等で積極的に発信する。 ②音楽科教育の存在意義やよりよい教育実践について検討する上で、他附属の音楽科教員や大学教員との情報共有の場を設定し、連携を強化する。</p>	<p>従来通りの「実物・本物を見る指導」の実践は、継続して行うことができた。一方で、外部への発信については、各研究会での発信はできたものの、ホームページの有効活用はまだまだ不十分であった。</p>	<p>「実物・本物を見る指導」の対外的な発信方法として、学校ホームページの有効活用を検討する必要がある。特に、磯観察や地学実習といった理科行事以外の指導について、効果的な実践例として発信をしていく必要がある。</p>	B	<p>③③ ・生徒目線の情報発信や、その教育を受けた卒業生のストーリーなど多層的な発信に挑戦していただきたいです。</p>	A	特記事項なし
		<p>①ホームページでの発信はあまりできなかつたが、本校を志望する中学生を対象とした学校説明会にて音楽授業を公開した。 ②附属平野中学校音楽科公開授業の司会をとめるなど、他附属との連携強化に積極的に取り組んだ。</p>	<p>来年度以降、他附属との連携強化に向けた具体的な取り組みをさらにすすめていく。</p>	A	<p>③④</p>	A	特記事項なし

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取り組み内容 (評価指標)	自己点検評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	
(3) 本校の実践を広く地域に発信するとともに、教育実践・研究活動での地域との連携を進める。	<p>■美術科</p> <p>岡山大学教育学部附属中学校及び岡山県、兵庫県、大阪府の公立学校美術科と共同で教育実践報告会を企画、運営する。</p>	岡山大学附属中学校および岡山県立高校2校と共に、数学科と美術科による教材開発とその実践を実施することができた。	昨年同様、教育大附属ということから公立学校が設立する研究団体への所属が叶わず、情報が不足していた。引き続き、幅広く教育関係諸団体との情報交換をはかる必要がある。	⑳		
	<p>■英語科</p> <p>令和7年度新設の「英語教育チャットグループ(附属学校園および大学)」を活用した日常的な情報共有・議論</p>	小学校、中学校、高等学校、大学から計14名が参加し、日常的に英語教育関係の最新情報の共有や必要に応じたの議論を行った。学会や書籍、webサイト等もリスト化して情報共有を行った。	運用開始時に、「運用に関する申し合わせ事項」を作成し、全11校園および大学の英語教育関係教員に周知を行ったが、周知の方法には工夫が必要である。任意の組織であるので参加は自由だが、英語教育の発展を目指すのであれば、より多くの教員の参加が必要だと考えられる。	㉑		